法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

『おもろさうし』の「ふし名」について

島村, 幸一 / SHIMAMURA, Koichi

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
10
(開始ページ / Start Page)
304
(終了ページ / End Page)
345
(発行年 / Year)
1983-10-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002597

Hosei University Repository

『おもろさうし』の「ふし名」について

島村幸一

序

オモロには、冒頭の右肩に「ふし名」が入っている。その数はオモロ、一五五四首中一三六三首にも及び、大部分のオモロに「ふし名」がある。

この「ふし名」が、「曲節」であることを最初に述べたのは世礼国男で、「琉球音楽歌謡史論」(昭和十五年)の中で「節名はどこ迄も『節廻し』即ち曲名であって、決して所謂題名――歌章の題目ではない」[1]ことが、述べられている。世礼はさらに「歌謡史論」の中で、「十三ノ四〇かうちすづなりがふしの出自は、十三ノ六二か十三の一三八であるか曖昧であるが、十三ノ六二おもかはのみしまがふしの出自が、十三ノ四〇であるから、此の二首の節名は交換的出自として、十三ノ六二をかうちすづなりがふしの出自歌章とする。又十三ノ一三八かうちすづなりがみのふし(ママ)(かうちすゞなりぎやかみ〳〵のふしの略)の出自も十三の六二で、かうちすづなりがふしと出自を同じくしてゐるから、後者は前者の省略されたもので、同一節と見ることが出来る」とも述べており、後年、仲原善忠が『おもろのふし名索引』(昭和二十六年)で示した「曲節」の考え方――例えば、Aというオモロの「ふし名」が、Bというオモロを出所としていれば、Aのオモロの「ふし名」とBのオモロの「ふし名」は、同一の「曲」であるという考え方――を、すでに具体的に指摘している。まさに、世礼国男はオモロの「ふし名」研究にとって、画期的な役割を果たしたといえるだろう。

世礼が「歌謡史論」で示した「ふし名」の「曲節」に対する考え方を、引き継ぎ整理したのは、仲原善忠であろう。仲原は『おもろのふし名索引』で、世礼の考え方にそって「ふし名」を「曲節」にまとめ、出所を明らかにし、五十音順に整理して「ふし名」の全貌を我々の前に見せてくれている。「ふし名」の研究において、仲原の果たした役割は大きい。[2] ただし、仲原の『おもろのふし名索引』を詳細にみていくと、「曲節」のまとめ方の一部に、「重複オモロ」を媒介にした「グルーピング」[3]があり、問題がないわけではない。例えば、一番代表的な例をあげて説明すると、「あおりやへかふし」と「はつにしやかふし」とを同一の「曲節」としている例をあげることができる。この例は、1―21(あおりやへかふし)と3―139(あおりやへふし)と13―863(はつにしやかふし)とが「重複オモロ」であるために「あおりやへかふし」と「はつにしやかふし」とを同一の「曲節」としてまとめたものと思

Hosei University Repository

われる。だが、「重複オモロ」を媒介にした「グルーピング」は、世礼の考え方にはない。仲原独自の考え方だと思われるが、はたして正しいか。

オモロが、歌謡である以上、同じ詞章が別々の「曲節」で謡われる可能性は次に示すように大いにあることだと思われる。(4)

2—84

うらおそいふし

一こゑく、もり、みや、あけれは、

あか、なさかちよわより、

もちろちへ、こかきよる、きよらや

又あかる、もりみや、あけれは

9—503

かなふくかふし

一こゑく、もり、みやげれは、

あか、なさがちよわより、

もちろちへ、こかしよる、きよらや

又あかるもり、みやげれは

右に示した二首のオモロは、『校本おもろさうし』・岩波本『おもろさうし』で、「重複」が指示されているとおり、ほぼ同じ内容を持ったオモロである。しかし、2—84の「うらおそいふし」と9—503の「かなふくかふし」は、それぞれ別々の「曲節」に属している。つまり、世礼が示した「曲節」の考え方に立てば、この二首は歌詞がほぼ同じであるが、別々の曲で謡われるオモロなのである。歌謡の一般的なあり方を考えれば、このような例は、多くあるだろう。

仲原が、「重複オモロ」を媒介にして「グルーピング」をしている例は、全部で五組ある。(5) しかし、「重複オモロ」でありながら「ふし名グループ」(曲節)が異なる他の十四組(6)を仲原は同一の「曲節」に「グルーピング」していない。これもおかしいが、「重複オモロ」を媒介にした「グルーピング」は、先に述べたように行き過ぎがあり、問題があろう。

世礼によって基本的な考え方が提出され、仲原の『おもろのふし名索引』によって整理されていったともいえるオモロの「ふし名」だが、オモロの音楽がほとんど失われている現在となっては、世礼国男によって示された「ふし名」の理解、特に「曲節」への理解は、実証しようがなく、仮説の域を出ない。が、『おもろさうし』の中には唯一、「ふし名」を二つ持ったオモロがあり、世礼が示した

Hosei University Repository

「曲節」の考え方の妥当性を裏づけるひとつの資料とすることができる。(7)

11—648

かねくすくのろのふし

一こいしのか、くに、いけ〳〵し、
しまつれ、くにつれ、み物（くまからうらおそいふし）

又まちらすか、くにいけ〳〵し

又よなはるの、くにいけ〳〵し

又とゝろ、きの、くにいけ〳〵し

又五たけの、くにいけ〳〵し

又七たけの、くにいけ〳〵し

又めつらしや、ゐくにいけ〳〵し

又さうさしや、ゐくに、いけ〳〵し

このオモロは「かねくすくのろのふし」で謡い出されながら、二行目で「くまからうらおそいふし」（ここからうらおそいふし）とあるように、「反復部」の冒頭で「うらおそいふし」に「ふし」がかわることを示している。世礼の「曲節」の考え方に従えば、この「かねくすくのろのふし」と「うらおそいふし」とは、別々の「曲節」であることが確認できる。したがって、世礼の示した「曲節」の考え方を前提にすれば、このオモロは表記どおり、途中から「曲節」を変えるオモロということになる。逆にこのことは、世礼国男が指摘した「節曲」に対する理解が、妥当性をもったものであることを示していることにもなろう。

本稿は以下、一、『おもろさうし』における「ふし名」の成立、二、「ふし名」のグルーピングの結果から、三、まとめ、という具合に論をすすめていくが、あくまでも、その前提は、世礼が「歌謡史論」で示し、仲原善忠によって踏襲され、今日に至っている「曲節」の理解に立って、「ふし名」を分析してみたものである。

一、『おもろさうし』における「ふし名」の成立

本土歌謡における〈節〉の定着を世礼国男は「琉球音楽歌謡史論」の中で、次のように述べている。

潮来節、松坂節、博多節、オイトコ節などの如く、音曲歌謡の名称に、何々節と称へることは近世（徳川時代）以後のことで、上中近古時代に於ては、さう云ふことはなかった。（中略）文献の上で始めて一の独立した音曲名として節の接尾語を附して呼ばれてゐるのは文祿慶長の頃流行した隆達節であるが、これも寛文貞享の頃まで「竜達が小歌」「隆達流」などと呼ばれ、同時代の平九

Hosei University Repository

郎節も「平九流」と称へられ、元和寛永頃に流行した弄済節も単に「らうさい」などと呼ばれてをって、果して最初から隆達節、平九節と称せられたかは頗る疑はしいのである。明暦の頃から流行した投節に至って初めて固定名称となり、それからマガキ節、節、(ママ)山合土手節（中略）等が起り、寛保以後に起った俗謡からは、ホンニサ節、ドン〳〵節（中略）という様に、何々節と呼ばれるのが普通になった。

世礼は、『おもろさうし』の「ふし名」と関連させて述べてはいないが、この指摘は重要である。「明暦」は西暦になおすと一六五五年から五八年、『おもろさうし』の編纂は一五三一年（嘉靖十年）、一六一三年（万暦四十一年）、一六二三年（天啓三年）と三回以上にわたって編纂されていることを考えると、「ふし名」は「本土よりもいっそう早い時期に、曲、節をあらわすことばとして『ふし』が固定していたことがわかる」(8)ということになる。

ところで、オモロの「ふし名」の出所を見てみると、一五三一年に編纂されたとしている巻一、一六一三年に編纂されたとしている巻二のオモロの「ふし名」には、以下に示すように一六二三年に編纂されたとする巻三以下のオモロを出所にする「ふし名」がある。(9)

〈巻一の用例〉

17 あおりやへもりやあんしかふし　〔出所10—519〕

22 きこへ大きみみてつからいのてかふし　〔出所7—352〕

23 よりきけらへかふし　〔出所12—672‖15—1085‖22—1511〕

29 大さとのけすのおもいあんしきやふし　〔出所20—1361〕

32 天より下の王にせがふし　〔出所17—1195〕

33 あおりやくもりやあちのふし　〔出所10—519〕

36 あかおなりかみのふし　〔出所13—965〕

37・38・39 かくらとよてかふし　〔出所3—114‖9—508〕

40 せちやり〳〵やまとしまひちめかふし　〔出所3—97〕

〈巻二の用例〉

54 くに中のしよりもりくすくかふし　〔出所8—409〕

55 しよりま人かふし　〔出所10—525〕

56 たいらこしらへかふし　〔出所10—540〕

60 きたたんよのぬしのふし　〔出所15—1108〕

61 中にしのとよみうらかふし　〔出所3—104〕

64 くに中のしよりもりくすくかふし　〔出所8—409〕

70 あかいんこかふねたてはかふし　〔出所8—464〕

73 ねいしまいしのふし　〔出所6—316‖22—1551〕

Hosei University Repository

以上の事実は、少なくとも一五三一年に編纂された巻一、一六一三年に編纂された巻二の「ふし名」は、巻三以下の編纂年、一六二三年以後に付されたものであることを意味しよう。このことは、『おもろさうし』において「ふし名」と歌詞とは、必ずしもその成立が同一の時期ではない可能性があることを示すことにもなる。(10)

一体、「ふし名」はどの時期に『おもろさうし』に付されたのであろうか。

『おもろさうし』以外の資料で「ふし名」が見えるのは、『中山世鑑』（一六五〇年）にひかれているオモロだろう。『中山世鑑』巻五には、四首のオモロが記載されている。12—694・695・733・734がそれであるが、そのうち12—695の詞書には「かぐらとよでのふし」がみられる。(11)

嘉靖二十四年八月十九日
つちのとの、とへのへの、とらの時に
きこゑ大ぎみの、み御まへより、もゝがほうごとの時に、給し、かぐらとよでのふし

『おもろさうし』の12—695のオモロは、これと大体以た詞書を持ち、歌詞も、「ふし名」も同一のもので、「世鑑」に記載されているこのオモロは、12—695と同一のオモロであることはまちがいない。「世鑑」に記載されている他の三首のオモロには、『おもろさうし』においては、三首とも「ふし名」

があるにもかかわらずそれがない。このことは、少々気になることではあるが、12—695にあたる「世鑑」記載のオモロに、「かぐらとよでのふし」が見られる以上、「世鑑」成立の時期に、オモロには「ふし名」があったと考えねばならない。となると、最も合理的な理解に立って、『おもろさうし』における「ふし名」の成立を想定すれば、やはり、一六二三年の巻三以下の編纂時ということになるだろう。そう考えると、「明暦の頃」（明暦は一六五五年から一六五八年）に「曲節」を示す「ふし」の固定をもとめた世礼の叙述とも、時期的に近づいてくることになる。

さて、ここで『おもろさうし』内部の資料から考え合わせていくことにする。

オモロの「ふし名」には、その出所が不明なものが、私の調べた限りでは、次の一五グループある。

①2—68　御さけやらはかふし
②2—83　あんのつのけたちてたやれはかふし
③7—369　とかしきのかねつかふし
13—774　これはとかしきのかねつかふし
21—1439　うちいちへはとかしきのかねつかふし
④7—380　しやこのおやかふし
⑤7—384　あちおそいかみしよわちやるきやうちやくかふし
⑥10—543　しらしよきなわかふし

Hosei University Repository

⑦ 11—588 かねくすくおもいくわのふし
21—1475 うちいちへはかねくすくおもいくわのふし
⑧ 13—776 うちいてはきやのしかふし
⑨ 13—851・18—1278 うちいてはあかるゑとのふし
16—1146 あからいいとのふし
17—1248 うちいちへはあかるへとのふし
⑩ 13—898 大ゑとのふし
⑪ 15—1117・1118・1119・21—1406 ふるけものろのふし
16—1136・1137・1138 うちいちへはふるけものろふし
20—1351・1352 ふるけむのろのふし
⑫ 17—1188 ちやうかねよらめきふし
⑬ 18—1258 うらしろたちよいふし
⑭ 20—1346 たまくすくあまつゝかふし
⑮ 20—1365 おもたかふし

以上あげた中には、書写の過程で「ふし名」を書き誤り、その出所が不明になってしまったものもあるに違いない。しかし、一字や二字の書き誤りで出所が確定できなくなってしまったとは考えられないものも、確かに存在する。一般に『おもろさうし』の「ふし名」の命名法には、「直接命名法」と「間接命名法」[12]とがあるとされているが、この命名法はいずれもオモロの一部から「ふし名」をとる方法であり、出所が不明な「ふし名」の存在は、『おもろさうし』編纂の問題を考えさせるものであろう。

伊波普猷は『おもろさうし選釈』(大正十三年)、『校訂　おもろさうし』(大正十四年)の「序」等々で、『球陽』や『向姓家譜　大宗』を使いながら、一七〇九年の首里城の大火にともなう『おもろさうし』の焼失と翌年の『おもろさうし』「再編纂」の問題を論じている。その後、嘉手苅千鶴子氏は「『おもろさうし』書き改めと『混効験集』編纂について」(『南島史学』第一一号、昭和五十二年)によって、現在我々が手にしている『おもろさうし』と「再編纂」前の『おもろさうし』とは、そのまま同じものではないことを指摘し、さらに、池宮正治氏によっても「『おもろさうし』概説」(『尚家本おもろさうし』付録『解説　おもろさうし』昭和五十五年)等において、「再編纂」の重要性が解説されている。私も「『混効験集』についての考察」(『琉球の言語と文化　仲宗根政善先生古稀記念』一九八二年)において、『混効験集』引用のオモロの中に、『おもろさうし』中に見あたらないオモロが幾つかあり、「再編纂」の前に、オモロの散逸を考えなくてはならないことを論じた。[13] 出所不明の「ふし名」についても、この「再編纂」前のオモロの散逸にその原因を求めることができよう。すなわち、「ふし名」は「再編纂」前の『おもろさうし』の段落で成立しており、一七〇九年の王城大火による『おもろさうし』

Hosei University Repository

焼失のあと、『おもろさうし』の「再編纂」をはかったが、散逸が生じ完全な姿で再現できなかった。オモロの一部をとった「直接命名法」「間接命名法」による「ふし名」は、その中に散逸したオモロを出所とする「ふし名」があり、結果として出所が不明の「ふし名」を我々に見せていることになっている。出所不明の「ふし名」の存在は、『おもろさうし』の内部から、「ふし名」の成立を一七一〇年の『おもろさうし』「再編纂」以前に、「ふし名」が成立していたことを示していたことを物語っているということができよう。

「ふし名」の成立を考えるもうひとつの重要なオモロ内部の資料は、「ふし名」とその出所との間に一定の傾向を持った表記上の相違が存在することである。このことは、当然オモロと「ふし名」の成立との年代的なずれを考えさせるが、前述した問題を考え合わせながら合理的な「ふし名」の成立を想定しなくてはならない。

「ふし名」と出所との表記の相違で著しく目立つのは、格助詞「か」とその口蓋化音の表記「きや」との書き変えである。オモロの格助詞〈か〉は、「か」の表記と「きや」の表記を持つが、後者は先行母音〔i〕による音条件の下で口蓋化した仮名表記である。ところが、「ふし名」の格助詞〈か〉は、オモロの〈か〉とは事情が異なり、ほとんどといってよいほどに「か」の表記のみしかみられないのである。資料をあげて説明すると、「ふし名」では「か」だが、出所部分が「きや」である例は次のとおりである。[14]

1—12　大きみがいくさせちみおやせかふし〔出所部1—10＝3—128　きこゑ大きみきやいくさせちみおやせ〕

3—105　大ぬしかてんとゝろかふし〔出所部10—511　大ぬしぎや天とゝろ〕

3—130　きこゑ大きみがいくさしちかふし〔出所部1—10＝3—128　きこゑ大きみきやいくさせち〕

4—158　きこゑ大君かみやかのひやしかふし〔出所部3—117＝12—653　きこゑ大きみきやみやかのひやし〕

5—239　きこへ大きみかおれてあすひやうれはかふし〔出所部3—116＝12—652　きこゑ大きみきやおれてあすびよわれは〕

5—261　おもろねやかりかあまゑわちへからいみやとよわまさりかふし〔出所部8—393　おもろねやかりきやあまへわちへからはいみやといみきやまさる〕

Hosei University Repository

7—368　きこへ大きみかみてつからかふし〔出所部7—352　きこゑ大きみきやみちへつからいのて〕

8—425　ねやかりかすとくにいちや事かふし〔出所部8—430　ねやかりきやすとくにいちや事〕

12—693　大きみかみ御まへともゝそのあすひかふし〔出所部12—659　大きみきやみ御まへともゝそのあすひ〕

13—864　大きみかいとめつらかふし〔出所部10—515　大きみきやいとめつら〕

13—876　きこへ大きみかせちとよむせいくさかふし〔出所部3—135＝1—17(16)　きこゑ大きみきやせちとよもせいくさ

13—880　うちいてはせのきみかいやけたもきかふし〔出所部21—1403　せのきみきやいやけたむき〕

21—1413　きこゑ大きみかさやはたけおれわちへかふし〔出所部1—34＝22—1533　きこゑ大きみきやさやはたけおれわちへ〕

21—1444・1445　くめのこいしのかとりかゝりかふし〔出所部10—550　くめのこいしのかとりぎやとうとり〕

これとまったく逆の例は、わずかに次の一例にすぎない。

21—1462　うちいちへはおわもりきやけおのきみかふし〔出所部13—796　おわもりかけおのきみ〕

「ふし名」の出所部の格助詞「きや」が、「ふし名」では「か」になる例は、以上一五例あるが、その逆の例はこの一例である。このことは、また「——かふし」という場合の格助詞〈か〉でも裏づけることができる。オモロには、「——かふし」のかたちと、その口蓋化した「——きやふし」のかたち、「——のふし」のかたち、そして格助詞のない「——ふし」のかたちがあるが、そのうち最も多い型が「——かふし」で、八〇〇余りある。ところが、「——きやふし」のかたちは、わずか1—29、10—515、15—1061、22—1531の「ふし名」の四例にしかすぎない。出所中の格助詞「きや」が「ふし名」では、「か」に書き直される現象は、「——かふし」の場合とも対応しているのである。

この「ふし名」の表記にあらわれる格助詞「きや」が、「か」に書き直される傾向は、規範的な意識に基づく表記であるとも考えられるが、他の「ふし名」の表記の中に著しい規範表記の現象が見えないことから、むしろこれは現代の琉球方言へそのまま通じる変化だと考えてよいと思われる。(16) つま

Hosei University Repository

り、「ふし名」の表記にあらわれる格助詞〈か〉が、その出所部の表記が「きや」であるにもかかわず「か」と表記する現象、また、「――きやふし」のかたちがわずか四例であるのに対して、八〇〇余りもの用例として「――かふし」のかたちがある現象は、オモロが文字に記載された以後の新しい音変化の現象を反映させたものであるということができる。[17]

「ふし名」が、その表記からオモロが表記された時期とずれた後代的なものであるとすると、前述した「ふし名」の成立を、巻三以下の編纂時に求める考え方が困難になってくる。しかしながら編纂の内実を、「首里王府が、沖縄・奄美の島々村々に伝わるオモロを三回にわたって採録し、冊と為したもの」[18]と必ずしも考えなければ、困難はそれ程なかろう。すなわち、オモロが「沖縄・奄美」の各地から実際に採録したものであるか否かは別としても、第三回目の編纂の時点では既になんらかのかたちで文字化されており、編纂の内実は、既に文字化されていたオモロを、王府が一定の枠を設けて編纂したということではあるまいか。その編纂は、オモロ自身の表記にはなるべく手を加えないかたちで行われ、「ふし名」が新たにオモロに付された。このために「ふし名」の表記の一部は、第三回編纂時点での方言を反映させることになった。オモロの本文と「ふし名」との表記の相違は、このように生じたものである。第三回目の編纂の内実は、既になんらかのかたちで文字化されていたものを、一定の枠を設けて編纂したものであると考えれば、第三回目の編纂の時点で「ふし名」がオモロに付されたと考えても、矛盾しなくてすみそうである。

巻数	曲節数	首数
1	0	0
2	1	7（15%）
3	0	0
4	2	7（13%）
5	0	0
6	0	0
7	0	0
8	2	5（6%）
9	0	0
10	0	0
12	0	0
13	10	126（53%）
14	1	2（3%）
15	1	8（11%）
16	0	0
17	0	0
18	1	2（3%）
19	0	0
20	1	2（2%）
11・21	10	6（27%）
22	0	0

『おもろさうし』における「ふし名」の成立は、以上述べてきたように、第三回目の編纂時に、新たにオモロに記載されたものであることが想像される。

二　「ふし名」の「グルーピング」の結果から

以下は、世礼国男によって示された「曲節」の考え方にそって、全「ふし名」を「曲節」に「グルーピング」し、その結果を述べたものである。「グルーピング」した「曲節」のうち、同巻内のみによって「グルーピング」される「曲節」を、最初に上の表に示す。[19]

巻一三もしくは、巻一一、二一を除いて、同巻内で構成された「曲節」は、『おもろさうし』全体にわたってわずかである。このことは、各巻の間には「曲節」的にきわだった差がなく、巻独自の特徴的な「曲節」を各巻がはっきり持っていないことを意味していることになるだろう。これは次ページの表に示すように「ふし名」数が多い「あおりやへかふし」系の「ふし名グループ」、「うらおそいふし」系の「ふし名グループ」が各巻に差はあるものの、広く『おもろさうし』

Hosei University Repository

巻数	「あおりやへかふし」系おもろ	「うらおそいふし」系おもろ
1	25 (61%)	1 (2%)
2	5 (11%)	20 (44%)
3	31 (49%)	1 (2%)
4	26 (43%)	3 (5%)
5	22 (30%)	5 (6%)
6	6 (11%)	0
7	0	0
8	3 (2%)	1 (1%)
9	0	0
10	0	3 (7%)
11	28 (29%)	6 (6%)
12	21 (22%)	4 (4%)
13	3 (1%)	3 (1%)
14	0	4 (6%)
15	18 (24%)	6 (8%)
16	2 (4%)	13 (25%)
17	19 (26%)	1 (1%)
18	8 (25%)	1 (3%)
19	0	33 (66%)
20	14 (25%)	17 (27%)
21	25 (20%)	7 (6%)
22	4 (9%)	3 (6%)

全体にわたって存在していることによっても示すことができる。[20]

全般的なことをいえば「あおりやへかふし」系の「ふし名グループ」は、「神女オモロ」を中心とした巻と一部の「地方オモロ」の巻を中心に、「うらおそいふし」系の「ふし名グループ」は、一部の「地方オモロ」を中心にして、『おもろさうし』全体にわたって存在しているということができる。

以上見てきたように、同巻内で構成さるれ曲節が一部の巻を除いて少ない点、「ふし名」数が多い「あおりやへかふし」系の「ふし名グループ」、「うらおそいふし」系の「ふし名グループ」が『おもろさうし』全体にわたって存在している点等の「ふし名」のあり方から見る限り、『おもろさうし』は全般的に各巻、それほど音楽的な差を持ったものではないということができる。このことは、例えば「地方オモロ」といわれ

る巻にもいえ、「ふし名」から見る限り、「地方オモロ」は「地方」に音楽的な基盤を置いた歌謡では決してないということになる。つまり、「地方オモロ」も含めてオモロは、全体として、王府によって集中的に管理されていた歌謡であるということが、「ふし名」の「グルーピング」の結果からいうことができる。

ところで、『おもろさうし』の巻々が「ふし名」から見る限り「曲節」的にきわだった特徴を見せないのに対して、唯一著しい特徴を見せるのが、巻一三である。巻一三は、同巻内のみによる「曲節」が一〇グループ、一二六首もあり、これは全体の五割以上にもあたる。さらに驚くことに、「はつにしやかふし」系「ふし名グループ」のようなほとんどの「ふし名」が、巻一三のオモロで構成されており、かつ「ふし名」の出所が大部分巻一三よりなる「ふし名グループ」を、これに加えると、一六六首にもなり、巻一三の七割が、巻独特の「曲節」によって構成されているという結果になる。[21]

この特異性は、「船ゑとのおもろ御さうし」としてこの巻に編纂されているオモロが、多く、他巻とは異なる「曲節」をもっていることを想像させる。例えば、次に引く詞書のある13―763が「しよりゑとおもろのふし」であることは重要である。[22]

尚清王加那志御代
嘉靖三十二年五月四日つちのとのとりやらさもりのまうはらいの時にきみま物のみ御まへより
おかみ申みせゝる

Hosei University Repository

天つきのあんしおそいかなし天の御み事にゑとつくり申候（傍点、島村）
やふその大やくもい
こゑくの大やくもい
こふはの大やくもい
くによしの大やくもい

しよりゑとのふし
一天つきの、御さうせ、
大きみは、たかへて、
やらさもり、いしらこは、
おりあけて、ともゝすへ、
せいいくさ、よせる、まじ
又わうにせの、御このみ、（以下省略）

「ゑとつくり申候」という詞書の故に、このオモロは「しよりゑとのふし」という「ふし名」が付されていると考えてよかろう。「しよりゑとのふし」系の「ふし名グループ」は、九七首あるが、すべて巻一三に集中して存在する特異な「ふし名グループ」である。[23] 数の上から、巻一三は「しよりゑとのふし」系の「ふし名グループ」の存在によって、他巻と大きくきわだっているといえる。巻一三の表題「船ゑとのおもろ」は、「しよりゑとのふし」と関係があるといえそうである。そして、さらに「はつにしやかふし」のような大部分が巻一三のオモロで構成されている「ふし名グループ」も、「しよりゑとのふし」となんらかの関連を持ち、「船ゑとのおもろ」に、入れらるべくして入れられた「ふし名グループ」であったという想像が許されよう。

しかし、問題は多い。巻一〇の「ありきゑとのおもろ御さうし」は、表題が「ありきゑと」とあるにもかかわらず、巻一三のようにきわだって自巻内で「ふし名グループ」を構成するようなことはないし、[24] 巻一四の「いろ〳〵のゑさおもろ御さうし」とて、同様である。[25] こう考えて行くと「船ゑと」、「ありきゑと」、「いろ〳〵のゑさ」等の表題が、音楽的な内容を反映した表題であるか、あやしくなる。

しかしながら、とりあえず、今のところ「ふし名グループ」の「グルーピング」の結果から、巻一三がきわだって特異な巻であり、それは巻一三のオモロの音楽的な特異性を反映したものであろうということは考えられそうである。

三　まとめ

『おもろさうし』における「ふし名」の命名法は、仲原善忠によって「直接命名法」と「間接命名

Hosei University Repository

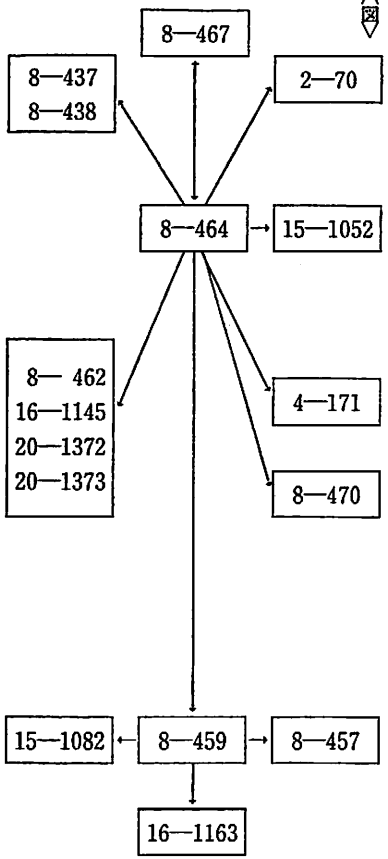
法」とに整理されている。「直接命名法」にしろ「間接命名法」にしろ、いずれもオモロの命名法は、歌詞の一部――それも大部分、「一」以下の冒頭部――が出所になっている命名法であり、その意味では歌謡の命名法として特殊ではない。[26] そして、竹内勉氏が日本の民謡の命名法を分析して次のように述べられている点とも、オモロの「ふし名」は関連し興味深い。[27]

それは（「わが国の民謡の曲名は」……注、島村）「××唄」と呼ばれる〈唄添加種〉の曲名と、「××節」と呼ばれる〈節添加種〉の曲名が対立して存在していることである。しかも〈唄添加種〉は〈用途科〉〈職名科〉の二種しかないのに、〈節添加種〉のほうは、〈うたいだし文句〉〈囃子詞科〉〈補足語科〉〈演唱詞型科〉〈演唱形式科〉〈用途科〉〈職業名科〉〈人名科〉〈地名科〉と圧倒的に多いのである。それだけではない、〈唄添加種〉と〈節添加種〉が共存しているのは、〈職名科〉と〈用途科〉だけで、その〈用途科〉の場合も、〈節添加種〉は南日本という特定の地域を中心としたごく限られたところにしか存在せず、大勢としては〈唄添加種〉系統とみるべきである（傍点、島村）。

竹内氏によれば、「うたい出し文句」が曲名になっている民謡は、「××唄」とは命名されずに、「××節」と命名されると言う。これは、『おもろさうし』の「ふし名」とも符合し、オモロの「ふし名」が広く日本の民謡の曲名と重なった命名法だということがわかる。またもうひとつ、〈用途科〉[28]の「××節」は、「南日本という特定の地域を中心としたごく限られたところにしか存在」しないという叙述は、オモロの「ふし名」とは直接関係はないものの、南日本においては「××唄」よりも「××節」という名称の方が、一般的であり、根深いことをうかがわせ興味深い。

しかし、『おもろさうし』の「ふし名」の命名法として、基本的な命名法になっている「間接命名法」の存在は、特異であり謎でさえある。「間接命名法」は、次の図に示すように、Aというオモロの「ふし名」が、Bというオモロの歌詞からとられ、Bのオモロの「ふし名」はCというオモロの歌詞からとられるように、次から次へと順々に「ふし名」がオモロの歌詞からとられて行く命名法であ

〈図〉



＊→は，出所となったオモロとその「ふし名」が付されたオモロとを表す。例えば，8—464 → 2—70 は，2—70の「ふし名」が8—464からでていることを示している。

Hosei University Repository

。あかいんこかふねたてはかふし　2—70・8—467〔出所8—464〕
。あかいんこかふねたてはるふし　15—1052〔出所8—464〕
。あかいんこかふねたてかふし　4—171〔出所8—464〕
。あかいんこかふねたてふし　8—470〔出所8—464〕
。うちいてはふねたてはかふし　8—459〔出所8—464〕
。ふねたてはかふし　8—462・16—1145・20—1372・1373〔出所8—464〕
。あかのこかふねたてふし　8—437・438〔出所8—464〕
。かねのてたみこしかふし　8—464〔出所8—467〕
。月てたのやにてゝかゝちよわれかふし　8—457〔出所8—459〕
。月てたのてゝかゝちよわれかふし　16—1163〔出所8—459〕
。あかのおゑつきねはのおゑつき月てたのやにてゝかゝちよわれかふし　15—1082〔出所8—459〕

る。図に示したようにこの命名法に、よるオモロの「ふし名」は、8—464を出所とする「ふし名」、8—467を出所とするもの、8—459を出所とするものというように、ひとつの「曲節」が三つもの「ふし名」を持つことになり不思議である。また、この命名法による「ふし名」には、本歌というものが存在しない。これも、不思議である。図の「ふし名グループ」で示すと、8—464は、2—70をはじめ

一二首の「ふし名」の出所となっているが、8—464自身の「ふし名」は、8—467から出ていて、いわゆる本歌というものではない。オモロの「ふし名」は、このようにひとつのオモロがたとえ十数首のオモロへの「ふし名」の出となっていても、そのオモロの「ふし名」は別のオモロを出所としており、本歌ではない。[29] これも、一般的な歌謡のあり方と相違し、特異である。

さらに、「ふし名」と巻との関連が稀薄である点も、理解しにくい点である。例えば、「うらおそいふし」系の「ふし名」は、巻一五「うらおそいきたたんよんたむさおもろの御さうし」にはわずか六首で一割にもみたないオモロにしか付されていないが、巻二「中城越来おもろ」には二〇首、四四%、巻一九「ちゑねんさしきはなぐすくおもろ御さうし」には、三三首、六六%ものオモロに付されており、「ふし名」と巻との関連性がつけられない。[30] この問題は、「間接命名法」とも関係しようが、現在のところ理解しがたい点である。

次に理解が困難な点としてあげられるのは、同一の「ふし名」が付されたオモロでも、左に示すように一節の長さ(音数)に相当のひらきがあることだ。

4—193
あおりやへふし
一きこへさすかさか、

Hosei University Repository

よかほう、あまへ
又とよむさすかさか

5—280
あおりやへふし
一おぎやかもいかおこのみ、
ぢはなれは、そろへて、
あまゑ、のちやうは、けらへて、
ともゝすへ、きやめも、
おきやかもいしよ、
すゑまさて、ちよわれ
又あちおそいか、おこのみ、
又大きみは、たかべて
又をなりきみ、たかへて
又けさよりも、まさり
又むかよりむ、まさり

又すゑのわう、やれは

「あおりやへかふし」系の「ふし名」は、二五〇首余りのオモロに付されている「ふし名」であるが、中にはこのように極端に一節内の長さ(音数)が違うものがある。袋中が『琉球神道記』の中でオモロを「竺土ノ唄ノ如シ」[31]と述べていることや、『琉球国由来記』巻四「御唄(神歌)」の項に「当国御唄者、神代之歌也。言葉少、情尽タリ。謡ニ長詠一也。(以下略。傍点、島村)」[32]と見えること、オモロ主取りであった安仁屋家のオモロを継承しているという山内盛彬氏のオモロが意味をほとんどとれぬくらい「産み字」や「挿入語」をともなったウタである点等々を考慮すれば、オモロが多くの長詩型の歌謡とかなり違った謡われ方をしていることを想像してもよい。だが、先に示したような一節内の音数が極端に異なるオモロが、はたして同一の「ふし」で謡われたかどうか、理解しやすいことではない。

最後にきて、『おもろさうし』における「ふし名」が持っている特異性や不思議さ、理解しがたい点を幾つか述べた。これらを解決することが、実は真に「ふし名」を理解することに違いない。私が、本論で述べた「ふし名」の成立についての考察や、「グルーピング」の結果から述べた問題は、「ふし名」を考える上では、あくまで外観的な問題で、「ふし名」の根本的な問題はその先にあると言ってよい。

Hosei University Repository

オモロの「ふし名」を理解するためには、「間接命名法」といわれる命名法が、何故オモロに付されているのかが、根本的な問題だろう。また、「ふし名」が何故、どのような過程をへて、巻三以下の編纂時に記されたのかも、今後の考察の対象になってこよう。「ふし名」を理解することは、オモロの成立や編纂を理解するにあたって重要であろう。「ふし名」の謎は深いが、その解決は重要である。

注(1)「歌謡史論」の引用は、『世礼国男全集』(昭和五十年・野村流音楽協会発行)による。以下同じ。なお、伊波普猷は「ふし名」を、「題名」と考えており、『おもろさうし選釈』(大正十三年)では第一首目の10―512の「ふし名」がないオモロを「むかしはじめからのふし」と冒頭の詞章をとって「ふし名」としている。世礼のこの発言は、伊波の研究を意識にしたものと考えてよかろう。

(2) 世礼は「おもろ双紙中に記された」「曲節」は「約二百十一節」と具体的な数字を述べている(「歌謡史論」)。仲原は、「ふし名索引」で「おもろ双紙に出ているふしの名は約三〇〇あるが曲の数は一二〇程度」と整理している。他に仲原は、「なかふし」(11―84他)を世礼が〈中ふし〉としているのに対して〈長ふし〉とするなど、世礼の考え方を正しているものがある。

(3)「グルーピング」とは、世礼の考え方に従って、「ふし名」を「曲節」にまとめることをいう。「ふし名グループ」などという言葉が後述されるが、これは、「グルーピング」の結果、同じ「曲節」に属する「ふし名」をいう。「おもろのふし名ノート」(池宮正治・『琉大法文学部紀要　国文学論集』第二一号・一九七七年)参照。

(4) オモロの引用は、すべて仲原善忠・外間守善編『校本おもろさうし』(昭和四十年)による。ただし、若干だが私見により改行したものがある。

(5)「あおりやへかふし」・「はつにしやかふし」系以外の四組は以下の通り。

。4―188と22―1514とが、「重複」していることで、「すつなりかふし」と「なつたてはかふし」とを「グルーピング」している。

。7―379と13―851とが、「重複」していることで、「うちいてはふへのとりのふし」と「うちいてはあかるゑとのふし」とを「グルーピング」している。

。17―1219と18―1249とが、「重複」していることで、「ねうしの時かふし」と「さんことよたしかふし」とを「グルーピング」している。

。11―621と21―1437とが、「重複」していることで、「くめのよゝせきみいけくしくかふし」と「おにのきみはゑやなさいきよにしなてかふし」とを「グルーピング」している。

(6) 注(5)で示した以外の「重複オモロ」でありながら、その「ふし名」は別々の「ふし名グループ」(すなわち、別々の「曲節」)に属するものを、以下に示す。

1―33あおりやくもりやあちのふし
10―529あおりくものあんしのふし
13―876きこへ大きみかせちとよむせいくさかふし

3―110きみのつんしかふし
7―388いへのいのりのふし

3―114みしまいのられてかふし
9―508さしふおれなおちへかふし

12―673よきけらへかふし
15―1086しませんこあけしの〜のろのふし

11―186たんなふし

Hosei University Repository

21—1430おもろねあかりしまうつなかふし
7—369とかしきのかねつかふし
11—617うちいてはくめのやまくすくのふし
21—1439うちいちへはとかしきのかねつかふし
11—587たんなかふし
21—1474うちいちへはすゑのちにやうるわしかふし
11—590たんなかふし
21—1477おもろねやあかりやすゑのちにやうるわしかふし
12—672よきけらへかふし
15—1085しませんこあけしのくのろのふし
22—1511くにおそいきみのふし
6—330うちいては大きみ御まへかふし
22—1512おちいてはいとかすおもろのふし
5—239きこへ大きみかおれてあすひやうれはかふし
22—1516のろあかりのふし
17—1234しまのうらかふし
18—1264かつれんはいきやるかつれんかふし
22—1541かつれんはいきやるかつれんかふし
6—324きこへさすかさつゝみのあちなりかなしふうくにうちよせるかふし
22—1525かみしも天とよみかふし
3—92きみのつちかふし

7—365ふし名ナシ
9—497いへのいのりのふし

(7) この資料は、別の見方をすれば問題がある資料である。一般にオモロの一節は「一」以下から一番目の「又」の直前までで、多くが「対句進行部」と「反復部」とからなると考えられている。しかし、このオモロの二番目の「ふし名」は「反復部」の冒頭に付されており、従来の考え方からすると、一節の中に「ふし名」が二つ存在し、混乱する。ここでは、とりあえずそのような問題が、あることのみ記しておく。

(8) 池宮正治「おもろのふし名ノート」

(9) 用例にあげた出所は、その出所が明らかに特定できるものについてのみあげ、「あおりやへかふし」、「うらおそいふし」等々の「ふし名」の出所を特定のオモロに限定できないものは、除いてある。たとえば「あおりやへかふし」は、仲原は4—153を出所としているが、巻四の第一番歌から二一番歌までが、「きこゑあおりやへや」ではじまり、特定することはできない。池宮「おもろのふし名ノート」参照。

(10) 「ふし名」の書き入れが第一回編纂時より下るのではないかということを、出所のオモロとの関係から述べているものに、竹内重雄氏が法政大学に一九七八年に提出したマスター論文（未発表）がある。また、最近秋山紀子氏も「『おもろさうし』のふし名について」（『地域と文化』第八号・一九八一年）で、同様のことを述べておられる。

(11) 引用は、伊波普猷、東恩納寛惇、横山重編纂『琉球史料叢書』（東京美術・昭和四十七年）による。

(12) 「ふし名」の命名法の分類は、前述した論文で世礼国男が行っている。その後仲原善忠が、『おもろ新釈』（昭和三十二年）において、世礼の分類を整理し、「ふし名」の命名法を「直接命名法」・「間接命名法」と名付けた。

(13) 「再編纂」前にオモロの散逸があったということは、巻一一と巻二一の重複のあり方からも考えることができる。巻二一の混乱したオモロを復元して行くと、巻一一と重なってこない部分ができる。これは、

Hosei University Repository

「再編纂」前のオモロの散逸が理由であると思われる。

(14) 「重複オモロ」が出所となっているものについては、両者の出所部の表記が一致しているもののみを、用例とした。

(15) 1―17は「きこゑ大きみきやせちとよみせいくさ」である。

(16) 現在の琉球方言の格助詞〈が〉は、口蓋化する環境にあっても口蓋化することがない。

(17) 秋山氏は、注(10)の論文で13―876の「ふし名」に「きこへ大ちみかせちとよむいくさかふし」があり、オモロ本文中ではみられない「きみ」を「ちみ」と口蓋化音で表記した例を指摘しているが、尚家本では「きこへ大きみ――」であり、新しい音変化の用例としては、問題を残すであろう。注(10)の論文参照。

(18) 外間守善「おもろ概説」(日本思想大系『おもろさうし』一九七二年初版)

(19) 巻一一・二一は、内容的に久米島関係のオモロであり、一緒にあつかった。また、首数の( )内の数字は、各巻のオモロに占める割合を示している。同巻内によって構成される「曲節」を以下示す。

〈巻二〉

おもろくさりおろちへかふし　2―42・44・45→出所2―43
おもろくさりかふし　2―46・47・49→出所2―43
いちやたてなおちへかふし　2―43→出所2―42

〈巻四〉

よそわるあやこのふし　4―184→出所4―183
よそわる大やこかふし　4―201→出所4―183
あやこかふし　4―189→出所4―183
くにとよてかふし　4―186・190→出所4―189
しまうちあちおそいかふし　4―173→出所4―174

うち出はもゝとちよわれかふし　4―174→出所4―173‖22―1520

〈巻八〉

おもろねやかりやきよらやかふし　8―410→出所8―425
おりほしかなしけかふし　8―430→出所8―425
ねやかりかすとくにいちや事かふし　8―425→出所8―430
いしかねのやにかふし　8―455→出所8―456
世そへうちもちへみおやせかふし　8―456→出所8―455

〈巻一三〉

しより𐀀とのふし　13―748・750・752・754・756・757・759・760・761・762・763・764・765・766・767・768・779・780・782・783・784・791・799・800・802・803・804・808・809・814・815・816・817・852・854・856・857・858・859・860・861・867・869・870・871・875・878・886・887・888・889・890・900・901・902・903・904・905・906・907・908・909・911・912・913・914・915・918・919・920・921・930・935・638・939・941・943・944・945・946・947・948・949・951・958・969・22―1548・1549→出所不明
首里𐀀とのふし　13―885・923・936→出所不明
しより𐀀とふし　22―1554→出所不明
おくらつかふなやれかふし　13―749・753→出所13―748
おくらつかふし　13―755・22―1547→出所13―748
すさへ大里かふし　13―751→出所13―750
あきみよのとまりかふし　13―873→出所13―872
あきみよのふし　13―964→出所13―872
かけめなのしよのふし　13―872→出所13―964

Hosei University Repository

あけしよのかみにしやか良金よらちへのふし　13—790→出所13—839
うちいてかつかねかふし　13—839→出所13—790
すへのよきなわかふし　13—773→出所13—772
うちいてはいやゝめつらしかふし　13—772→出所13—778
うちいてはきみのあんしのふし　13—778→出所特定困難
うちいてはおかちや大ころかふし　13—806→出所13—794
うちいてはおしやへこかふし　13—794→出所13—806
おもかはのみしまかふし　13—807→出所13—785
かうちすつなりかみかふし　13—883→出所13—807
かうちすつなりかふし　13—785・959・960→出所13—807
うちいてはかうちすつなりかふし　13—793→出所13—807
しけかけのかみにしやかふし　13—952→出所13—797
つましけかふし　13—797→出所13—952
つよつけたはりやせかふし　13—770→出所13—805
もちよるふなさきのふし　13—968→出所13—805
みちへりきうかけにはりよるかふし　13—805→出所13—770
なよくらかもちよろかふし　13—777→出所13—781
なよくらののろのあまへとみかふし　13—781→出所13—777
きゝみあくむかふし　13—820・825・22—1543→出所13—821
ふいのとりのふし　13—821・824・827・829・831→出所13—820‖22—1543
ふへのとりかふし　13—894→出所13—820‖22—1543

ふへのとりのふし　13—823→出所13—820‖22—1543
うちいてはふいのとりのふし　13—830→出所13—820‖22—1543
うちいてはふへのとりのふし　※7—379→出所13—820‖22—1543
うちいてはほいのとりのふし　19—1314→出所13—820‖22—1543
おちいてはふゑのとりのふし　※22—1542→出所13—820‖22—1543
※7—379‖13—851、13—830‖22—1542

〈巻一四〉
かつれんのまみなこかふし　14—995→出所14—996
くめすよの主のふし　14—996→出所14—995

〈巻一五〉
大にしのたらつかふし　15—1098・1100・1101・1124・1125→出所15—1120
ちやなのよゝきよらかふし　15—1120→出所15—1101
ひるのやしゑのしかふし　15—1121・1122→出所15—1124

〈巻一八〉
さんことよたしかふし　18—1249→出所18—1250‖17—1220
みやくすくこかねしかふし　17—1220・18—1250→出所18—1249‖17—1219

〈巻二〇〉
あかるもちつききみのふし　20—1345→出所20—1344
にしかないのふし　20—1344→出所20—1345

〈巻一一・二一〉
あまみやみるやにかふし　21—1395→出所21—1394

Hosei University Repository

あまみやみるやにふし　21｜1396・1397・1398↓出所21｜1394
うちいちへはあまみやみるやにかふし　21｜1414・1458・1484↓出所21｜1394
うちいてはあまみやみるやにかふし　11｜562・565・573↓出所21｜1394
あらかきのもりのふし　21｜1394・1401↓出所21｜1395
あらかきのもりにうちあかるたゝみかふし　11｜599↓出所11｜626‖21｜1487
あらかきもりにうちあかるたゝみかふし　21｜1417↓出所11｜626‖21｜1487
あらかきのもりにうちあかるひやしかふし　21｜1487↓出所11｜599‖21｜1417
うちあかるひやしのふし　11｜626↓出所11｜599‖21｜1417
いやゝとよたしよまくしとよたしよおやよりこのてかふし　21｜1422↓出所21｜1421‖11｜570
いやゝとよたしかふし　11｜568↓出所11｜570‖21｜1421
いややとよたしよまくしとよたしようらきらしやみほしやかふし　21｜1421↓出所11｜571‖21｜1422
うらきらしやみほしやかふし　11｜570↓出所11｜571‖21｜1422
くめのきみはいまへにかちよてこうかふし　21｜1410↓出所21｜1409
くめのきみはいかふし　11｜558↓出所21｜1409
くめのきみはへかふし　11｜559↓出所21｜1409
くめのきみはゑかふし　21｜1411・1499↓出所21｜1409
うちいちへはくめのきみはゑかふし　21｜1415↓出所21｜1409
うちいてはくめのきみはいかふし　11｜563↓出所21｜1409
おもとたけつかさこかふし　11｜625・21｜1483↓出所11｜558‖21｜1410‖21｜1443
おもとたけつかさこふし　21｜1409↓出所11｜558‖21｜1410‖21｜1443
おにのきみはいややほうひちへかふし　11｜586↓出所11｜641‖21｜1451
やほうひちへまちよらかふし　21｜1473↓出所11｜641‖21｜1451
おにのきみはへやもゝうらのとよむかふし　21｜1451↓出所11｜586‖21｜1473
もゝうらのとよみかふし　11｜641↓出所11｜586‖21｜1473
おにのきみはいやなさいきよにしなてかふし　11｜584↓出所11｜585
おにのきみはゑやなさいきよにしなてかふし　21｜1437↓出所11｜585
くめのよゝせきみいけ〳〵しくかふし　11｜621↓出所11｜593‖21｜1480
やちよこいよやにかふし　11｜585・593↓出所11｜584
きこへせのきみきやいけ〳〵とそろわはかふし　11｜594↓出所11｜622‖21｜1495
きこへせのきみきやわかきみけらへてつかへかふし　21｜1495↓出所11｜594‖21｜1461
きこへせのきみわかきみけらへてつかいふし　11｜622↓出所11｜594‖21｜1461
しのくりやはよなれかみかふし　21｜1488↓出所11｜637‖21｜1497
しのくりやわよなれかみのふし　11｜627↓出所11｜637‖21｜1497
みるやにやかふし　21｜1497↓出所11｜627‖21｜1488
ゑんことよたしよあちおそいてたとわかてたかふし　21｜1449↓出所11｜640‖21｜1450
ゑんことよたしよもゝあちやらはやちよもかふし　21｜1433↓出所11｜566‖21｜1432‖21｜1485
ゑんことよたしゆもゝあちかふし　11｜569↓出所11｜566‖21｜1432‖21｜1485
なかふし　11｜566・567・639・640
おにのきみこゑかふし　※9｜487↓出所11｜583
うちいておにのきみこいふし　21｜1400↓出所11｜583
うちいてかおにのきみこいふし　21｜1399・1407↓出所11｜583
きこへせたかこか世かけにせさかふし　11｜583↓出所9｜487‖21｜1400

Hosei University Repository

※9—487＝21—1400

(20) 本文で前述したように「あおりやへかふし」系の「ふし名グループ」には、「はつにしやかふし」系の「ふし名グループ」を入れない。「あおりやへかふし」系は、次のものである。

「あおりやへかふし」・「あおりやへふし」・「あふりやいかふし」・「あふりやへかふし」・「おちいてはあおりやへかふし」・「きこゑあおりやへふし」・「あをりやへかふし」・「きこゑ大きみかふし」・「なへたるかおもろのふし」。

「うらおそいふし」系は、次のものである。

「うらおそいふし」・「うらそいふし」・「おらおそへふし」・「うらおそいおもろのふし」・「うらおそいおもろかふし」・「うらそいおもろかふし」・「うらそいおもろのふし」・「おらそいおもろのふし」・「うおさけかふし」・「うさけかふし」・「うらおそいのおやのろかふし」・「うらそいのおやのろかふし」。

(21) 加えた曲節は、次のものである。

はつにしやかふし　11—556・557・13—769・822・828・832・833・834・835・836・849・850・863・893・896・897・910・927・931・932・933・937・940・950・956・963・967・977・978・979・980・981・22—1536→出所13—899

あかるへの大ぬしきこゑくにせりきよかふし　4—160→出所13—979

きこへくにせりきよかふし　13—874→出所13—979

きこへせのきみかとかはさめかふし　13—881→出所21—1402＝21—1469

うちいちへきこゑあおりやへかち天のせちおろちへかふし　21—1469→出所4—160

あくかへよゆはりあまやかせかふし　13—917→出所13—961

きすゝ大やこかふし　13—798→出所13—961

五くのまころくのふし　13—795→出所13—792

とまりみちへりきうかふし　13—792→出所13—795

とまりみちへりきよかふし　13—924・961→出所13—795

うちいてはとまりみちへりきよ（ふし）11—650→出所13—795

はねうちしちへはりよるきよらやかふし　13—922→出所13—924

へとのなよせりきよはねうちしちへかふし　13—934→出所13—924

(22) 13—762にも同様のことがいえる。

(23) 一例だけ22—1554が例外である。他の巻二二の三首のオモロは、いずれも巻一三と重複している。

(24) 巻一〇と巻一三との関連性は、まったくなくはない。例えば、巻一〇の「重複オモロ」を見ると、一五首中九首が巻一三と「重複」し、巻別の「重複オモロ」数では最も巻一三が多い。また、「ふし名グループ」を見ても、巻一三のオモロとのみ「ふし名グループ」を構成しているものが三組、九首（巻一〇の二〇％）あり、同じ「ゑと」ということで、相互にわずかながらの関連性が、みられる。

(25) もっとも、巻一四はほとんどのオモロに「ふし名」がない巻であり、七〇首中六二首に「ふし名」がない。世礼はこのことについて「皆ゑさ特有の同一の節で歌はれた為めに節名は記す必要がなかったものと考へられる」と述べている。

(26) 第一節以外が出所となっている例は、わずか次の六例にすぎない。

。やふつよためかちへかふし　11—596→出所1—39の第三節

やふつよためはかふし　21—1463→出所1—39の第三節

。きこへいろめきかふし　8—409→出所2—54の第三節

。中にしのとよみうらかふし　2—61→出所3—104の第三節

。しよりおやひかわふし　9—483→出所8—436の第二節

。大さとのけらへみやふのふし　8—463→出所9—479の第二節

Hosei University Repository

。てやんおなちやらのふし　9—507→出所10—535の第三節
　てやんおなちやらかふし　10—527→出所10—535の第三節

(27) NHKブックス『日本の民謡』(昭和四十八年)。なお、このことは矢野輝雄氏が『沖縄芸能史話』(昭和四十九年)の中で、触れておられる。

(28) ＜用途科＞は、「そのうたが使用される折の対象物の名詞に、演唱時動作を示す動詞の連用形が結びついて作りあげられた動名詞がとりあげられ、それがそのまま曲名にされる命名方式」で、例えば、「米洗い節」・「糸繰り節」等がある。

(29) 本歌というわけではないが、『おもろさうし』の中で「ふし名」数が多い、「あおりやへかふし」・「うらおそへふし」(うらおそいおもろのふし)・「しよりゑとのふし」系の「ふし名」は、それぞれ別の「ふし名」で呼ばれることが少なく、一般の「間接命名法」による「ふし名」とは趣を異にした面がある。このことは、これらの「ふし名」がそのまま固定的にある「曲節」をさし示す傾向を強く持つことを意味し、注目してよい。以下、三種の「ふし名」について記して行くと、「あおりやへかふし」系のオモロは、二五〇余首あるが、別の「ふし名」は、「きこゑ大きみのふし」(4—153)、「あかいんこおりるかふし」(8—411)、「なへたるかおもろのふし」(5—230)の三種にすぎない。「うらおそへふし」(うらおそいおもろのふし)は、一〇〇余首あるが、「うおさけかふし」(14—988・989)、「うさけかふし」(14—993)の二首、「しよりゑとのふし」は、九〇余首あるが、「おくらつかふなやれかふし」(13—749・753)、「おくらつかふし」(13—755・22—1547)、「すさへ大里かふし」(13—751)の三種をそれぞれ持つにすぎない。

(30) 「ふし名」と巻との対応が、若干みられるのは、「きみかなしかふし」系で、巻六「しより大君せんきみ君がなしもゝとふみあかりきみのつんしのおもろ御双紙」には、二〇(巻六の三七%)の「きみかなしふし」系の「ふし名」がみられ、最も多い「ふし名」になっている。しかし、これも何故巻八「おもろねやかりあかいんこがおもろ御双紙」に二四(巻八の二九%)の「きみかなしふし」系の「ふし名」が付いているのか

不明である。

(31) 横山重編者、昭和四五年、角川書店。

(32) 引用は、注(11)に同じ。

＜付記＞　本稿は一九七九年一月に琉球大学へ提出した研究生論文をまとめたものである。当時、論文を書くにあたって池宮正治先生から御助言いただいた。また、「ふし名」の「グルーピング」の作業には、池宮先生が当時作られた『おもろさうしふし名索引』(当時、草稿。後に『尚家本　おもろさうし』付録・昭和五十四年)を全面的に活用させていただいた。あわせて、感謝申し上げたい。なお、「ふし名」は『おもろさうし諸本校異表』(池宮正治編・『尚家本　おもろさうし』付録・昭和五十五年)によって、「尚家本」・「安仁屋本」の「ふし名」によっている。